

## 翳り

清水翔太

よく晴れた休日の昼下がりがりだった。実家の母から電話があり、

「お父さんがなんか、」

「なに」

「変、ていうか、うん」

「どう変？」

「なんか急にプラモデル買ってきて、組み立て始めたりとか。深夜」

「若いとき、趣味だったとか言ってたっけ」

「それはそうなんだけど、本当に急に。いや、もっとなんていうか、ついちよつと前に言ったことを忘れてたり、額に青痣つくってきて、どうしたのか訊いたら、覚えてなかったり」

「痴呆？」

「そういうのとも、ちよつと違う感じ」

母の言っていることは要領を得ず、その一週間後に休みを取り、半年ぶりに帰省することになった。

実家の扉を開けると、父はこちらに背を向けるかたちで座っていて、音で気づくなり振り返ることもなく、

「花壇見た？」

「花壇？」

そこでようやく僕を見ると、そのまま庭に対す窓を顎で指し、

「花、全部植え替えたんだよ」

そもそも実家の庭にどんな花が植わっていたのかも覚えていないし、いま自慢げに父が見つけているいくつかの花のうちパンジーしか分からないが、半年ぶりなのに、久しぶりとも、よお、とも言わない、いまも僕がそこに住んでいて毎日顔を合わせているかのような口ぶりは、明らかにいつ

もの父だった。帰ってたんだ、と母が白々しくキッチンから顔を覗かせる。飲み物を飲むジャスチャーをし、

「氷いる？」

「氷？」

「間違えた、コーヒーいる？」

「え？」

「アイスコーヒーかホットコーヒーか訊こうと思ったら順番間違えた」

こちらも普段の母で、それに対する父の鼻で笑うような感じもいつもどおり、でもたしかに母が電話で言っていたように、プラモデルの中でもかなり根気の要りそうな、米の空軍を思わせる航空機や蜂に似たヘリコプターなどが、テレビ脇のラックに並べられている。

「やるんだね、プラモデルとか」

「昔やってたからな」

父は爪楊枝を咥え、奥歯をいじりながら、

「お前は、どうなの？」

「なにが」

「仕事だよ」

「まあ普通」

「なに訊いても、普通」

「早く帰れるよ」

「結構なこった」

父の顔のまわりを、蚊や蠅ほどは大きくない黒い虫がひたすら回っていて、父はそれに気づく様子がない。六十五に迫っているのだから当然だが、老いを感じる。ようやく気づいたらしく、虫の軌道を目で追いながら、

「なんで虫って回るんだろうな」

「知らん」

父が手で追っ払うと虫は去っていく。ふたたび爪楊枝を咥える。

半年ぶりに会う父の横顔は、以前会ったときより幾分か皺が深い。リビングの大窓から入る真夏の陽光を背で受け、眼窩が翳って目が陥没しているように見えた。

父が僕の名を呼び、

「なあ」

「ん？」

「キヤッチボールしようや」

「なんで」

「いいだろ別に」

「グローブとかないだろ」

「あるよ」

玄関の靴箱の扉を開くと、もう一生使わないであろう履き潰した靴が置かれている段の端にグローブが二つあった。

「なんであんの」

「昔のやつ」

どっち使う？ と二つ差し出したので、

「どっちでも」

黄土色のそれを、ほい、とこちらに投げ渡す。行くぞ、とも言わず父がもう一方のグローブを嵌めて、玄関を出ていく。扉の隙間から、蟬の鳴き声と熱気が漏れ入る。閉まりかけた扉を押さえると、父がグローブ片手にボールをパン、パン、と投げ付けているのが目に入った。この強引な感じも、やはり父だ。

自宅から少し歩いたところに公園がある。入り口に、大きな蛙の石像が置かれていて、そのまま、カエル公園、と近所では呼ばれていた。父が肩を回したり、爪先を地面にとんとんと当てたりしながら、少しずつ離れていく。僕も下がり、父が止まったタイミングで足を止める。目算で十五メートルほど離れている。グローブを嵌め、指の先まで入っていることを確認したのち顔を上げると、もうボールが飛んできている。慌てて胸の前でキヤッチし、早いんだよ、と呟くが当然声は届かず、遠くにいる父は逆光になって、ただの黒い棒に見える。振りかぶり、指先からボールを離す。野球少年だった当時の感覚が残っていて、ボールは緩やかに放物線を描いて父の胸元に飛んでいく。パンツと快音が響き、グローブに収まる。

「ナイスボール！」

その声が甲高く、一瞬まったく別人のものに聞こえた。父がボールを投

げ返してくる。陽光の中に消え、一瞬のちに出てきたのは黒い点、それが徐々に近づいてきて白さを帯び、目の前で軟球になる。顔の前で捕らえ、こちらでもパンツ、と快音が響く。

父とのキャッチボールなど、子供のときぶりかもしれない。若いときの父、その空気感、顔などがまったく思い出せず、逆光で黒くなっている父を見ていると、たとえばどこかのタイミングで、仮に父に似た人間が父と入れ替わっていても、気づかないかもしれない、と思う。とくに自分が一人暮らしを始めてからの十年間、半年に一回実家に帰る程度で、日々の変化は分からないし、帰るたびに老けたな、なんか顔変わったな、と思うこともあるのだから、それはあり得るかもしれない、などと思っていると目の前にボールがあり、少し反応が遅れ、グローブの端に当たって遊具のほうに転がっていく。正式名称の分からない、地球儀に似た、球体のジャングルジムみたいなその麓、砂の盛り上がったところで止まる。取りに歩き、腰を屈め、ボールを掴んだところで振り返ると、父が立っていた。呆けたように一点を見つめている。

「懐かしいなこれ」

「これ？」

球体のジャングルジムの、湾曲した鋼管を掴み、

「これ」

父が足を骨組みのあいだに入れ、上部を掴んで乗っかる。

「おお、いい感じ」

顔だけ振り返り、

「回してくれ」

「なんで」

本気で言っているのかふざけているのかが分からず、ああ、と鋼管を掴み、とりあえず少し回してみると、とにかく重い。ようやく一回転したところで手を止めると、父がこちらをじっと見ている。

「全然回ってねえぞ」

「うん」

「飛んでみたいなあ」

「は？」

よく分からないままふたたび掴み、全身の筋肉を使って、今度は二回ほど回す。止まると父は、

「もっと回せよ」

「え？」

「回せって。回せや」

手を止めたまましていると、父は無表情でこちらを見つめてくる。

「回せ、回せ回せ」

父がいまどういふ感情で、なにを考えているのか、まったく分からない。

本当に回してほしいのか、ふざけているのか。空気に耐えられず、

「いや、子供がやるやつだろ」

当たり前のことを言わなければならなくなった。ややあつて破顔し、

「そっか」

「ん？」

「子供がやるやつだな、これ」

父は笑う。なんだったんだいまのは。そして手を差し出してきたから、なに、と言うと、

「ボール」

「ああ」

父の手に載せる。

先ほどの位置に戻り、キャッチボールを再開する。球の速度に目が慣れてきて、もうエラーをすることはない。誰もいない公園に、グローブにボールが収まる、パンツ、という音だけが一定のリズムで響く。

球体のジャングルジムが目に入る。たしかに父、ちよつと変かもな、とは思いますが、どう変かと言われるとわからないし、すごい変、というほどでもない気がする。そもそもいままでの父がどんな感じだったか、なにに怒ったり気に障ったりするのか、長いあいだ会っていないぶん、記憶を辿ろうとするとわからなくなってくる。飛んでみたい、とか意味不明だけど。

「どうだった？」

「よくわからん」

「変じゃない？」

「いつもと違う感じはするけど」

「ね？」

「まあ、歳じゃない」

「そっかあ」

母が盆から饅頭を取り、フィルムを剥いて口に運ぶ。父は、知り合いが引越すからその手伝いをする、と出かけていた。

窓越しに花壇を見つめていると、

「なんか、急に植え替えるって」

「ああ」

「そんなこと、一回も言ったことなかったのに」

「定年になって新しい趣味、とか」

「プラモデルも？」

「プラモも」

「うん、でもそうかも」

「え？」

母は饅頭のフィルムを指先でいじりながら、

「私もさ、六十超えてから、いろんなことが変わったの」

「へえ」

「まず化粧をしなくなったでしょ」

「うん」

「文字読むの嫌いだったのに、小説とか読むようになったでしょ」

「いいことだ」

「急にコーヒーが飲めなくなったり」

「へえ」

「あとは、あれ、手芸始めたんだ」

「手芸？」

「糸縫い合わせて、果物とかつくるの」

「いいね」

「いいでしょ」

「てか、父さんのこと言えないじゃん」

そうだね、と笑い、母は盆を持って立ち上がる。流しに置いて戻り、

「なんかさ、ずっと一緒にいると分からなくなるんだよね」

「まあそうか」

「近すぎてさ」

「饅頭をつまんで目の近くにやり、

「この距離で見てたらさ、饅頭って分かんないじゃん」

「うん」

「離し、

「距離があるから、饅頭って分かるってか」

「うん」

「近いとき、ほんとわかんないんだ」

「ふたたび饅頭を目に寄せ、

「ただの黒じゃん」

「黒？」

「黒」

「饅頭、白いじゃん」

「ほら、とこちらに饅頭を手渡し、

「目に近づけてみ」

もつと、もつと、と母が言うのに合わせ睫毛に触れる位置までもつていくと、白いはずのそれが黒くなった。考えてみれば当たり前だが、自分の顔で翳り、対象が黒くなるのだ。

「たしかに」

「ね？」

「うん」

「饅頭を離し、

「この人、なんでこんなことしてんだろうとか、なに考えてんだろうとか、近いと分かんないんだよ」

「でも、それは離れててもそうだよ」

「え？」

「むしろ長いあいだ会ってないと、余計わからなくなる」

「そういうもんか」

「そうだよ、と僕は饅頭を手に席を立つ。リビングの窓際まで行って、顔

の前に饅頭を掲げる。

「ほら」

母が、

「本当だ、黒い」

「ね」

僕はまた席に戻り、

「この人こんなだっけ、とかは増えてく」

「そっか」

「うん」

「夕飯なにがいい？」

「なんでもいいよ」

「餃子は？」

「昨日食った」

「なんでもよくないじゃん」

花壇を見遣ると、黒い模様のせいとか、パンジーが笑っているように見えた。

自室に戻る。半年に一回しか居ないこの部屋は、母の手によって、かつて自分が住んでいたときに比べ、わりあい綺麗に保たれている。ベッドに腰かけ、部屋を見渡す。大学生のときで止まったまま、授業で使った分厚いテキストや、就職活動のノウハウ本などが、小説で満たされた本棚に入らず、壁際に積まれている。あれからまだ十年しか経っていないが確実に自分とは変わっていて、父も母も、僕の言動や思考の変化に気づき、まだ三十だから、若いよ、などと言いながらも、息子が成熟していくこと、老いていくことに、戸惑ったり、違和感を抱いたりしているのだろうか。

窓が四角く切り取った、雲のない空を見つめると、頭の中でなにかが回転しているような気がした。それが一瞬なにか分からなかったが、徐々に色が浮かび、輪郭がはっきりとする。球体の、ジャングルジムみたいなそれだった。

「回せ」

あのとき、父は本当にどういう感情だったのだろうか。あれは、老いと

かボケとか、そういうことなのか。空を見つめていたつもりが、いつの間にか壁を見ていた。背後に視線を感じ、振り向くと誰もいない。

引越しを手伝った礼としてもらったマカロンを、父は箱ごと、ほい、と母に渡す。長細い箱のリボンを解きながら母は、

「え、ピエール・エルメじゃん」

父が、

「あ？」

「有名なところ」

「へえ」

ダイニングテーブルに座り、缶ビール片手にスルメをしゃぶる。色とりどりに整列したマカロンを父の顔に寄せ、

「ほら」

「それが、なんとかエルメスカ」

「いやこれはマカロン」

「あ？」

「ピエール・エルメは店の名前だから」

「エルメス？」

「エルメ。スはいらない」

どんな会話だよ、と思うが、これでこの夫婦は何十年とやってきたわけだ。

どこからか小さな、多分日中に父の顔のまわりを飛んでいた黒い虫が寄ってきて、今度はマカロンの箱の周囲を回り始める。母がすぐに気づき、手で退けようとするが、虫は頑としてそこを飛び続けている。

「ええっしょん！」

父がくしゃみをする、虫は飛んでいく。母が飛沫から瞬時に箱を逃がすのが見えた。

「ねえ、かかったらどうすんの」

「ああ」

「犬みたい」

「犬？」

「犬が吠えるみたいなくしゃみ」

「うるせえなあ」

父が笑い、母も口元だけ笑う。

父が缶の残りを飲み干し、

「風呂入ろうかな」

立ち上がる。母が、うん、と小さく頷き、黄色いマカロンを口に運ぶ。

僕が、

「仲いいな」

「そう？」

「うん」

「いる？」

「ん？」

「マカロン」

「ああ」

差し出された箱には、色とりどりのマカロンが並んでいる。花壇のようだった。適当に取って口に運ぶ。

「うわあ」

「美味しくない？」

「甘すぎ」

「マカロン初めて食べたの？」

「わからん」

「最近父さん、お風呂長いんだよね」

「へえ。もともと短かったっけ？」

「ほんとなんも覚えてないんだね」

「父親の風呂の時間なんて覚えてないだろ」

「そっか」

リビングの端に置かれた、飛行機やヘリコプターなどのプラモデルが目に入る。精緻に出来ていて、見つめていると、いまにも動き出しそうだった。機体の翼が目がいく。

「なあ」

「ん」

「父さんて、あれ以外のプラモも作ってるの？」

「あれ以外？」

「いや、なんか飛ぶもんばっかだなと思って」

「そうね、言われてみれば。全然気づかなかったけど」

「飛びたいのかな、父さん」

「え？」

「ごめん、なんでもない」

自分で言っただけ、意味が分からないな、と思う。なにも考えずに発していた。母が時計を見た。

「それにしても遅いねえ」

いつ風呂に行ったか覚えていないが、体感では一時間ほど経っている。

「見てこようか」

「お願い」

浴室は二階にある。階段を上がっていくあいだ、妙な静寂に包まれているのを感じた。耳を澄ますが、水の音などが一切聞こえてこない。

浴室に接する洗面所の扉を開ける。音は聞こえないが、灯りは点いている。寝てる？ 半透明の扉越しに、じっと見つめる。大きな影が、浴槽ではなく洗い場のところにあっただけ。まったく動かない。

その影が、徐々に膨れ上がっていく感じがし、わずかに後退る。頭の中で、あのジャングルジムの球体が回り始める。飛んでみたいなあ。父の無表情の顔。

「なあ」

つい声を出してしまった。ややあって、

「ん？」

くぐもっているが、たしかに父の声だった。

「父さん、大丈夫」

沈黙があり、

「なにが？」

「風呂長くない」

「ああ」

影はまったく動かない。回せ。父の目を思い出し、

「今日さ、公園行っただろ」

「ああ」

「遊具、あつたじゃん」

「あ？」

「丸い、ジャングルジムみたいなの」

「あつたっけか」

影が動かないので、浴室が喋っているような感覚。

「ああ、あつたな」

「あれ、なんでやろうと思ったの」

「やろう？」

「回してくれって」

「ああ」

「普通やらないだろその歳で。それもしつこく回せって」

影はまた黙り込む。そこから返事がなくなり、しばらくすると、もぞもぞと左右し、横に膨らんでいく。なにかの羽のようにも見える。

「父さん」

「あ？」

「父さん、だよな？」

ふたたびの静寂。見つめるほど、影の黒さが増していく。浴室の扉の取っ手を掴む。開けるには押すのか引くのか、一瞬分からなかった。

〈了〉